

猫のことを考えていた。

都心の割に緑が多いせいとか、構内で動物を見かけることは時々ある。まだ出会であしたことはないけれど、狸たぬきとか鼬いたちとかが出るなんて噂もあるくらいだ。

前期最後の試験を終えてキャンパスを歩いていたら、いきなりにやあと鳴き声があったので立ち止まる。誰かの着信音とかかな、と思っただけれど、学部棟近くの植え込みから身軽に飛び出してきたのはやっぱり猫だった。

真っ白いその猫はどこかの飼い猫らしく、丸っこい身体をしていて、こちらに気付くとぴたりと動きを止めて、それから盛大に欠伸をしてみせる。あたしはしばらくそのままの体勢で眺めていたけれど、近付くこともせずにやがて視線を外して。

再び歩き出そうとして、何となく猫のいたほうをまた見遣ったら、いつの間にか猫はいなくなっていた。

それから、駅に着くまでずっと猫のことを考えていた。

最後に猫を見たのはいつだっただろう。少なくともこっちに引越してきてからは一度も見えていない。そうなると高校の頃、でもあんまり記憶がない。地元に行ったときは当たり前すぎて、いちいち覚えてなんていなかったんだろうか。

でも、いたはずだ。猫を飼ってる友達もいたし、近所でも三毛やら黒やらの猫を見ただことは覚えている。なのに、それがいつのことだったかが分からない。

電車に乗ってひと駅。本当は歩いてもいいんだけど、さすがにこの時期は暑いから乗をしたくなる。乗り換えてそのまま帰るか、それともちよつとぶらぶらしてみるか。頭では迷っていたはずなのだけれど、気付いたら乗り換えの改札とは逆方向に足が向いていた。

猫のことを考えていたからだ。

駅を出ると、騒音と熱気が一気にやってきて、あたしは少し顔を顰める。まだ微妙に慣れないんだよな、と息をひとつ吐いて、それからまた駅の中に戻った。階段を降りて、地下からエスカレーターで駅ビルに入る。外を経由したほうが近いのだけれど、このほうが涼しいルートで向かえるから。

そんなに暑さが苦手な訳でも、歩くのが厭な訳でもなかったはずなのに、たった数

か月で楽なほうを覚えてしまった。そんなことを考えていたらよけいに暑さが気になつてくる。あんまり焼けるほうじゃなくて、どちらかというところと真つ赤になつてひりひりするタイプだから炎天下には出たくないっていうのもあるけれど、それでもこのうねつとした陽射しは、気分的に耐えられそうにない。

夏が嫌いだとか、そういうことを考えたことはなかったけれど、やっぱり実家にした頃とはちよつと違う。暑さの質、っていうかタイプが違うのか何なのか、ともかく地域が変わるだけで感覚も変わるんだなつてことを知った。

駅ビルをぐるっと回るだけで、汗はすつかりひいていた。歩き回つて汗がひくつていうのも変な話だけど、少なくとも屋内は三月の終わり頃みたいな気温だったおかげで、ぼうつとしていた頭もすつきりする。特に買うつもりもない夏服を眺めて、そろそろ大丈夫かなと思つたところで、とんとんと肩を叩かれた。

「あ、やっぱり榛原さん」

「んあつ」

振り向いた先に大槻さんが立っている。思わず変な声を上げてしまったあたしは、慌てて咳払いをして誤魔化した。

「大槻さん、これからバイトですか？」

「んーん、図書館と書店行ってきた帰りなだけ。あつつかいからさ、ちよつと涼んでいこうかなつて思つたんだけど、ちよつと榛原さんっぽいひとがいたから」

同じような行動してる、と思つて少し笑つてしまう。確かに彼女の色素の薄い額はじわつと湿り気を帯びているような気もする。けれど別に赤くなつていなくてもないし、そんなにうだつているような感じもしなかった。

「あたしもそんな感じでした。そしたらどっかでお茶でも飲みに行きますか？」

「あーいいつすねえ、コーヒーおいしいとこ知ってるから行こう行こう」

猫のことを考えていたはずだったけれど、いつの間にかあの白い猫は頭のなかからいなくなつていた。

4

「あつほんとだ、すごい美味し」

ひとくち啜つて、あたしは思わず驚きの声を上げた。でしよでしよ、と嬉しそうに